

道、真理、命である イエス・キリストを信じ従う

ヨハネ14章 1~14節
2021年3月7日
松田 基子 師

私達はこの世界に誕生し、それぞれに人生が与えられています。その人生で、私達が究極的に求めなければならないものは何でしょうか。それは、私達の存在は、この地上の肉体を宿としている時間の中が、全てではなく、肉体の死後も、その存在は無くなることなく、その行き着く所は、**神様の御許(みもと)へ行くのか、或いは永遠の滅びへ行くのか、そのどちらか**であるという事です。どちらに行くのか、それは肉体を宿としている、この**時間の中に生かされている間に選び取らなければなりません**。しかし、人間の本性の悲しさは、自分の命の与え主である神様から離れているために、何が正しいかが分からず、**正しいものを選び取る力がありません**。

自分が如何に神様に対して罪を犯しているのか、その罪が如何に重いのか、それは、自分の力では解決することが出来ないもので、神様から永遠の滅びに捨て去られて、当然のものであると言うことが分かりません。そのために、永遠の滅びへの危機感もなく、自分の存在の行く末を真剣に考えようとはしないのです。そのような人類をなおも愛し、その人間の現実を分からせて、**永遠の滅びから救うために**、イエス様は神の子の位を捨てて、人の世に、人の子となって生まれて来て下さいました。

そして、神様の愛の御心を語り、愛の実体をその身をもってお示しになりました。イエス様は、神様が全ての人を愛して、だれも滅びる事が無いように、願っておられる、その御心を示すために、社会から締め出された人々の友となり、貧しく、病める人々を癒し、数々の奇跡を行って、御自身が、神様がイスラエルの**永い歴史の中に約束して来られたメシア、救い主であることを証(あかし)されました**。

それに対して民衆は、メシアについて、聖書から、くみ取る事をしないで、**自分達の期待するメシア像**を描き、ローマの圧制、抑圧からの、**解放をイエス様に期待**しました。

その一方で、宗教指導者たちは、イエス様の働きを、**律法違反者**として断罪し、民衆のイエス様への関心、信頼、期待に**嫉妬**し、イエス様を抹殺すること、それも神に呪われた者として、異邦人ローマの手によって、**十字架に架けて殺す事**に執念を燃やしていました。

そのような人間の自己中心とは反対に、イエス様は御自身のメシア、救い主としての使命が、なんであるか、しっかりと自覚しておられました。イエス様はヨハネ1章29節に、洗礼者ヨハネがイエス様に対して、証言した、

『**世の罪を取り除く神の小羊**』
として、全人類の罪をその身に一身に負って、十字架に架かり、罪の贖いをする事を覚悟しておられました。

いよいよ時は迫ってきました。そこで、イエス様は、事が起こる前に、弟子たちに一番大切なことを伝えられました。ヨハネ13章から17章までは、イエス様が弟子たちとの、最後の晩餐の席上で語られた告別説教が記されています。弟子たちはイエス様に出会い、その名を呼ばれ、それまでの生活、将来への計画など、皆捨てて、イエス様に賭けて従ってきました。3年有余、イエス様の働きに従い、神様の大きな御業の数々に触れてきました。弟子たちも民衆と同じ様に、イエス様がメシアとして、力を奮われる事を期待していました。

それなのに、イエス様はこれから捕らえられ、十字架に架けられるのです。**弟子たちは信頼し、全存在を賭けて来た主人を失うばかりか、追隨者として、命の危険にも晒されるのです**。イエス様はその事を良くご存知でした。そこでイエス様は弟子達に、14章1節で、

「**心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。**」
とお命じになりました。自己中心を性質とする

人間の信じ方と言いますのは、自分に都合が良い、自分に益する時は、信じるけれども、自分に不利になり、不安材料が出て来ると、信じるのを止めて、関係を切ってしまう。

しかし、**信じるという事**は、自分に良くても悪くても、どんなに不利益を被ろうとも、信賴して自分の**全存在を賭け続ける**ことです。弟子たちは神に選ばれたイスラエルの民の一員として、神様に対する、絶対的な信賴を小さい時からしっかり持っていました。天地万物を造られ、世界を支配しておられる神様に対しては、信じることができましたが、イエス様はこれから十字架に架かれるのです。弟子たちはその事に直面して、イエス様を信じ続ける事が出来るのでしょうか。

イエス様は弟子たちに、その心が、イエス様の十字架によってひっくり返され、動転し、不安に襲われる中でも、神様への信賴と同じ信賴を、イエス様に対しても失わず、イエス様が神の子であられることに、全信賴して行くように命じられました。今日もキリスト教に関心のある人々の中から、

『神様は信じられるけれども、十字架に架けられたイエス・キリストを信じることは出来ない。』と言う言葉が聞かれます。しかし、それは神様を信じているということにはならないのです。**十字架に架かれたイエス様を信じる事**によって初めて神様が分かり、神様を信じる事になるのです。

弟子たちにとって、師であり主人である、自分の存在を賭けた、イエス様がおられなくなるほど、不安で心騒ぐことはありません。でも、イエス様はそこに、弟子たちが天地万物、永遠を支配しておられる神様の御手の確かさに立つように、ご自身の上にこれから起こることの目的を2節に、

「私の父の家には、住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来

て、あなたがたをわたしのもつに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

と言われました。

イエス様は、十字架から復活、復活から昇天、そして、聖霊降臨が成されていく事をご存知でした。ここでイエス様は、全ては弟子たちを始め、イエス・キリストを信じる者達にとって、驚くべき恵みの道が開かれるということ、語られたのですが、弟子たちにはその内容の意味が、深すぎて、理解する事ができませんでした。

そんな弟子たちであるにも拘らず、イエス様は4節に、

「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

と言われたのです。弟子たちはイエス様が、

「あなた方のために場所を用意しに行く」

と言われた言葉が、

『天国に帰られる。』

ということだとは、誰一人気付いていませんでした。そこで、トマスが、5節に、

「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることが出来るのでしょうか。」

と、率直に尋ねました。イエス様は敢えて、トマスから疑問を引き出されたのだと思います。弟子たちがイエス様を十分に理解していない事は、イエス様が一番良くご存知でした。

しかし、それだからこそ、イエス様はここで、極意を、弟子たちに伝えておかねばならないと、お考えになったでしょう。イエス様はその極意を6節に、

「わたしは道であり、真理であり、命である。

私を通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

と言われました。

神の御子イエス様が、人となってこの世に来て下さるまで、人間が神様の御許に行ける道はありませんでした。人間の神様に対する背きの

罪は、神様との関係を断絶してしまいました。罪と言う濁流は、人間がどんなに修行を積んで神様に近づこうとしても、押し流してしまうのです。罪とはそれ程強力なもので、人間が太刀打ち出来るものではありません。罪が解決出来ない限り、人間に神様への道が開かれる事はありません。そこで、罪の濁流に呑み込まれて、永遠に滅びる以外にない人間を憐れんで、救いの手を差し伸べて下さったのは人間の命の与え主である神様でした。

しかし、罪を解決すること無しに、神様は人間に関係回復をお与えになることは出来ません。そこに、罪の無い神の御子が、人類の罪を負って、それに見合う罪の償いをする以外に、解決の道は無かったのです。イエス様はそのために、人の子となってこの世に生まれて来られました。そして、愈々人類の罪を償い、贖うために十字架に架かれるのです。神様はそこに救いの道を開かれるのです。そして、イエス・キリストを信じる者は、父なる神様の家、天の住まいに迎えてくださるのです。

罪によって、神様の御許へ行く道が、断たれてしまった人類に対して、イエス様が十字架に人類の罪を贖い、天国への道を開き、御自身を信じる者に、永遠の命をお与えになるのです。ここに神様の真理が明らかにされました。

ヨハネ18章37節で、イエス様はピラトに、

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。」

と言われました。神の御子イエス様こそ、人類にとって、道であり、真理であり、命です。イエス様の贖いなしに、イエス様を通らなければ、だれも神様の御許に行くことは出来ません。神様はそう宣言されているイエス様を通して、つまり、信じる事によって、神様の御許に迎えて下さるのです。

そこでイエス様は、7節に、
「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父をしる。いや、既に父を見てい

る。」

と言われました。イエス様は何時も、祈り、父なる神様の御心のみを行ってこられましたから、弟子たちこそイエス様が神の御子であられることを知っている筈でした。ところがフィリポは、8節に、

「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足出来ます。」

と言ったのです。

近くにいるものほど、分かろうとしないと言いますが、イエス様は、フィリポの求めに、9節で、

「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、

『わたしたちに、御父をお示してください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。」

と嘆かれました。

イエス様はここで、父なる神様と一体であられること、霊に於いて相互浸透しておられる事を告白しておられます。ヨハネ1章18節に、

「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」

とあります。独り子に肉体を与え、この世に送られたのは、神様御自身が、神様とはどんなお方であるかを表すためでありました。イエス様は唯、その一途に徹して、

「わたしがあなた方に言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。」

と言われました。

ここで注意したいことは、ではイエス様は、

『神様に支配されておられるだけなのか。』と言う疑問です。決してそうではありません。父なる神、子なる神の人格が無いと言う事ではありません。それぞれに人格をお持ちですが、常に愛で一致し、思いを一致させておられる。

『霊的に相互浸透しておられる。』

ということです。

また、イエス様は11節に、

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられるとわたしが言うの信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。」

と言われました。弟子たちこそ、イエス様と四六時中行動を共にし、イエス様の全てに触れているのですから、イエス様と父なる神様とは、霊的に相互浸透しておられ、正しく一つであるという事が実感出来た筈です。しかし、それが分からなかったということは、弟子たちはそれ程真剣に、イエス様に接してきてはいなかったということです。

しかし、そんなに不甲斐ない弟子たちであっても、イエス様は彼らに期待しておられます。イエス様は十字架、復活、昇天後、御自身が神様の右の座に着かれたなら、聖霊が降って来られることをご存知でした。イエス様は弟子たちに、聖霊による大きな働きを期待しておられました。

イエス様は、12節に、

「わたしを信じるものは、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」

と言われました。イエス様は、弟子たちが、十字架に躓くことは承知しておられました。しかし、また彼らが立ち帰って、イエス様を信じ、従って行くことに期待しておられました。そこに、御自身に依って成し遂げられる救いの福音を彼らに託されるのです。イエス様が行われる業、それは救いの道を開き、ご自身を信じる者に永遠の命を与え、真理の道を歩ませて下さることです。イエス様は、弟子たちが、この福音を伝えることを、

「もっと大きな業だ」

と言っておられます。その遂行のために、13節に、

「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。」

と約束して下さっています。

こうして福音が、聖霊に助けられ、弟子たちによって伝えられ、全世界に広がって行くところに、神様は御子によって栄光をお受けになる事になるのです。弟子たち、私達の使命は、イエス様こそ神の御子、真の救い主、人間存在を、神様の御許天国に住まわせてくださる道、真理、命である。このお方を通らなければ、このお方の贖い(あがない)を信じて従わなければ、救いはないと言う、この福音をイエス様に代わって宣べ伝える事です。私達は今、その御救いに入れられているのですから、隣人に向かって、人は誰もこの地上に生かされている間に、イエス・キリストを信じ、天の住まいを目指して、人生を旅すべきことを、宣べ伝えて行く責任があります。

イエス様の十字架を前にして、託された使命を、私達も新たにしようではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様
罪深い私達人類を救うために、
御子イエス様を人類に贖いのために送って
下さったその、愛と憐れみを感謝致します。

人生の如何なる時も主イエス様こそ
私の全存在の救い主と信じて恵みを望み見て、
信仰を全うさせて下さい。

またこの唯一の救いを
隣人に伝えて行く使命に
新たにその使命を自覚する者と
成させて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。